
1. 和

森瀬ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1. 和

【Nコード】

N5016P

【作者名】

森瀬ユウ

【あらすじ】

茶道部・鈴木一彦視点

灰色の雲が空を埋め尽くしていた。別段青空が好きというわけではない。それでもだらだらと視界の端まで続いていく灰色の群れは朝の気分に重苦しいほどの影を落として漂っていた。

帰りたい。

一彦は溜息を吐いた。吐き出したはずなのに、憂鬱な空気は今もなお肺の底に沈んでいた。

朝のホームルームが始まるまではまだ時間がある。校庭では野球部や陸上部などの運動部が朝の練習に励んでいるが、一彦のように純粹に登校するだけという人の姿はほとんど見当たらない。しかしそのほうが一彦には都合がよかった。ばったりと登校してきたクラスメイトと鉢合わせるということがないからだ。比較的交流のあるクラスメイトならともかく、大して仲もよくないクラスメイトと肩をつき合わせて同じ教室に向かうなど想像するだけで胃が痛くなりそうだった。

生徒玄関にたどり着きクラスの下駄箱に目をやると、案の定まだ誰も登校してきてはいなかった。

いや、違う。

一彦の視線が1つの靴を捉えた。一彦指定の下駄箱のすぐ隣。砂埃で汚れた運動靴が一足、そこにはあった。

(……佐藤か)

すぐにそれが誰のものであるのかに思い至る。

(それにしても珍しいな)

小さな違和感を覚えながら一彦は綺麗に磨かれた自分の革靴を下駄箱に仕舞った。そして上靴に足を入れる。上靴をきちんと履くために手を使うのが面倒で、爪先を数度床に打ち付けると、人気のない玄関には小気味よい音が響いた。しかしすぐに辺りは静まり返った。耳を済ませても校舎の中からは誰の話し声も聞こえてこない。

一彦は軽く息を吐いてから、3階にある自分の教室へと向かって歩き出した。

教室は一箇所だけ窓が開いていた。4月の下旬、この季節にしては冷たい風がそこから教室内に吹き込んでいる。生ぬるい温度の校舎の中、3階分の階段を上がった後だからかもしれない。冷えた空気を取り込む肺が心地よさを感じていた。

教室の中央に近い席では誰かが机に突っ伏している。明らかに染めていると分かる茶の髪。友人の、悠基だ。

「佐藤」

席に近付きながら一彦がその名を呼ぶが、悠基は何の反応も示さない。寝ているのだろうか。それならば敢えて起こす必要もないだろう。一彦はそれ以上声を掛けることはせず、自分の席へとカバンを下ろした。悠基のすぐ後ろの席だ。

佐藤と、鈴木。この国で1・2番を争うほどの平凡な名字を持つこの2人は、五十音順に沿った並びでは自然と近くに位置することが多かった。

開け放された窓の外、校庭のほうから遠い声が聞こえてくる。朝から元気だな、と一彦は思う。それでも校内は驚くほど静かだった。ガタガタ、と、一彦が椅子を引く鈍い音だけが酷く滑稽に教室内に響いた。

すると目の前に座る悠基の身体が揺れた。

「……ヒコ？」

そして声と共に頭が上げられた。言いながら悠基は自分の腕でぐしゃぐしゃになった前髪を整えている。

「おはよ」

一彦が短く言うと、笑顔を浮かべながら悠基が振り向いてきた。実に人懐っこい笑顔だ。それにつられて一彦もようやく笑顔を作る。「おはよー。何、お前、部活ないのにこんな早くから学校来てんの

？」

一彦の机に両腕を乗せて、信じられないといった風に悠基が尋ねた。

「早起きが習慣になってるんだよ。だらだら家にいてもどうしようもないし」

決して嘘ではない。通っていた中学校は運動部が盛んで、朝の活動は毎日あるのが普通だったのだ。高校生になった今でも身体はその感覚を失わずにいる。

「教室1番乗りー、とか言って喜んでるわけじゃないのか。小学生みたいに」

「お前じゃあるまいし、そんなことするわけないだろ」

悠基の発言に半ば呆れた口調で一彦は反論した。しかし一彦は悠基のいい加減で何よりも軽い性格を知っている。彼が本気でその言葉を発したのではないことは分かっていた。そのため気分を悪くすることはない。寧ろこのようなやり取りを楽しんでいる節さえあった。

教科書やノートをカバンから取り出しながら、今度は一彦が胸に抱いていた疑問を口にした。

「そういうお前こそ、珍しいな。今日は朝練ないのか？」

すると悠基は途端に不機嫌さを顔に表した。豊かな表情だ、一彦は妙に感心してしまう。

「それがさ、朝練は隔週でやる曜日が違うんだよ。今日は勘違いして剣道場に行っちゃったんだ」

「ああ、なるほど」

それを聞いて納得した。が、

「本当は自主練したいとこだけど、いちねんせーのがき、1人のために道場開けてもらえるか分からないからな」

今度は自嘲的なこの一言が引っかった。言われた台詞をそっくり写したかのような言葉。思わず眉をひそめた。

「何だそれ。先輩の言葉か？」

低い言葉で問いかけると、悠基は口元を吊り上げて笑った。

「先輩様のありがたーいお言葉、だ。最下級生ってのは面倒だな、まったく」

悠基の言葉が何を意味しているのか、一彦にはよく分かった。生意気ながらも実力だけは優れている新入生に、上級生はいい感情を抱いていないのだろう。中学校でも高校でも、つまらない上下関係は変わらないようだった。くだらない、と嫌悪感を抱きながらも、それに適応してしまい反抗する気も起こらない自分に吐き気がした。「ま、そのうち実力で黙らせてやるつもりだけだな」

一彦の机に頬杖をついて悠基は窓のほうへと視線を送った。口元では笑いながらも、眼差しは真剣そのものだった。

（他の何事にも真剣にならないくせに）

強い意志と光を持った悠基の瞳に、そう思う。常に軽いスタンスで真面目な態度など一切見せない悠基だったが、彼は1つのことに対してだけは誰よりも真剣な様子を見せるのだった。

すべてのことに対してそうであつたら、悠基は一体どんな力を見せるのだろうか。

（……勝てるわけがない）

それが一彦には酷く怖かった。

一彦が悠基の視線を追うと、1つだけ開けられた窓のそば、白いカーテンがゆっくりと揺れていた。

校庭と教室棟の間には2階建ての管理棟が建てられている。そのため3階からであってもグラウンドの様子は殆ど分からなかった。しかし校庭の奥に植えられている桜の木は一望できる。桜の木は緑の色で装われていた。花びらはもう殆ど散ってしまっているのだろう。

視界に影を落とす灰色の雲も、重く澱んだ空気も、そしてつまらない自分自身も。強い風に吹かれて消えてしまえばいいと思った。始まったばかりの、朝。

授業と授業の間の休み時間。トイレを済ませて教室に戻る途中、廊下を歩いていると声を掛けられた。

「鈴木くん、ちょっと待って」

一彦が立ち止まると、ちょうど通り過ぎようとしていた教室の中から優衣が顔を覗かせた。ちょっと待って、ともう一度言い直し、彼女は教室へと姿を消した。様子は伺えないが、教室の中からは生徒たちの活気のある声が溢れてきていた。授業開始までまだ少し時間がある。特に急ぐ理由もない。一彦は言われた通りに優衣が再び姿を見せるのを待った。

「ごめんね、急に呼び止めちゃって」

優衣は正方形の平たい箱を手に教室から出てきた。肩まで伸びたセミロングの髪がやわらかそうに揺れている。穏やかでやさしい顔つきをした女の子だ。

「大丈夫だよ。どうかした？」

「これ、家にあった父のなんだけど、鈴木くんにあげてもいいってえっと、帛紗ふくさ」

手にしていた箱を一彦に手渡しながら優衣は言った。

「帛紗？」

蓋を開けると紫色の絹の布が4つ折になって入っていた。帛紗ふくさとは茶道で茶器を取り扱う際などに使われる布のことである。茶道の稽古では必ず必要となる道具の1つであった。

一彦は驚いた顔で優衣を見た。

「これ、俺がもらってもいいの？」

帛紗は近々購入しなければならないと思っていたものだ。ありがたい申し出ではあるのだが、なんだか気兼ねもしてしまう。出会ってから日も浅い優衣に、決して安くはないものをもらってしまったいいものなのか。しかし、

「うん、いいよ。使う機会がなくて勿体ないから、使ってくれる人がいるのなら使って欲しいって」

遠慮しないで、と笑う優衣の申し出を一彦はありがたく受け入れることにした。

「そっか。じゃあ遠慮なく。ありがとう、助かるよ」

使われることなく仕舞われたままとなってしまふのならば、本当に勿体ない。だったら自分が利用したほうがいいだろうと思った。いつか別の形でお礼をすればいいことだ。

一彦は蓋を閉めてしっかりと箱を持ち直した。

「それにしても、太田さんのお父さんも茶道をやってたなんて驚きだな」

そして純粹に思ったことを口にした。しかしこの一彦の言葉を聞いて優衣は苦笑した。

「ああ、違うの。学生時代、近所にお茶の先生が住んでて、お前も稽古をしろって押し付けられたんだって。父は全然お茶に興味はなかったみたい。今もね」

「なんだ、そうなのか」

その優衣の話に、一緒になって一彦も苦笑してしまう。だったらなおさら、帛紗は自分が使ってあげたほうがいい。

「私今週の放課後、図書委員の当番なんだ。だから今日は部活行けるかどうか分からなくて。鈴木くんの教室まで渡しに行こうってたところだからちようどよかった」

「そうなんだ。わざわざありがとう。太田さんは休むかもしれないって先輩に伝えておくよ」

「うん、お願い。ありがとう」

「それじゃ、また」

休み時間は短い。授業開始に間に合うように、一彦は軽く手を上げてその場を後にした。優衣もそれに応えて教室へと入って行った。優衣の教室から2つ離れた教室。早足で歩けばあつという間の距離だ。一彦のクラスも賑やかな声に包まれている。一彦は静かに自分の席へと戻った。そして優衣から受け取った箱を大事そうにカバンの中に仕舞った。

目の前の席では机に身体を預けて悠基が寝ている。

（コイツはよくこんな短時間のうちに眠れるな）

時計を見ると次の授業開始まであと1分しか残されていないかった。
（起こさないと）

一彦は机の上に出していた数学のノートを悠基の後頭部めがけて振り下ろした。一彦が遠慮なくこんなことができるのは悠基が相手の時くらいだろう。ノートが軽い音を立てて頭に当たると、その音と衝撃に驚いた悠基ががばっと上半身を起こした。

きよろきよろと左右を見た後、悠基はようやくそれが自分の後ろに座る一彦の仕業だと気が付いた。

「何するんだよ、ヒコおー」

そんなに強く叩いたつもりはないのだが、彼は頭を抑えながら恨みがましい目つきで振り返ってきた。

「授業始まるよ」

しかし一彦はしれっとした様子で言い放つ。悠基は時計に目をやった後、諦めたように溜息を吐いて黒板のほうへと向き直った。別に叩かなくてもいいのに、などとぶつぶつ呟いているが、一彦聞こえないフリをする。今は怒ったように文句を垂れているが、悠基はすぐにそのことを忘れて、ヒコ、ヒコと懷いてくるのだ。彼はそういう男だ。だからこそ一彦も悠基に対しては気を抜いて接することができた。もちろん悪い気はしない。

朝に感じた重苦しい気持ちは徐々に薄れてきていた。

授業の開始を告げるチャイムの音が校内に響いた。

放課後の掃除当番が終わってすぐに部室に向かった。管理棟1階の1番端、進路指導室の隣の部屋がそうだ。

廊下に面した扉を開けると右手側には木製の小さな下駄箱が備え付けられており、床の上にはスノコが置かれている。玄関のような役割の空間だ。スノコの上で靴を脱ぎ、膝の高さほどの段を上がつ

て障子を開けると、そこには8畳間が2つ、計16畳の和室が広がっている。この和室が一彦の所属する茶道部の部室である。

一彦は上靴を脱ぎ、段に上がって正座した。右手で障子を数センチほど開けた後、下から25センチほどのところに手を差し入れて身体の中央まで開ける。そして次は左手で残りの半分を開けた。この方法が正式な障子や襖の開け方なのだという。すうっと、障子は大きな音を立てることなく静かに開いた。

正座をしたまま和室の中をそっと窺うと、和樹が窓の傍で胡坐を組んで本を読んでいた。彼は一彦が来たことにまだ気付いていないようだった。

「池田先輩、こんにちは」

一彦がよく通る声で話し掛けると、その声に気付いた和樹が本から顔を上げた。

「ああ、ごめん、気が付かなくて。こんにちは」

そして本を置いて座り方を正座へと変えた。一彦は和室の中へとじって入り、正座をしたまま畳に手について深々と頭を下げた。

「今日もよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

同じようにして和樹も頭を下げる。

はたから見たら土下座をしているように感じられるかもしれない。しかしこれはお辞儀なのである。謝罪ではなく感謝や敬意を示すための礼だ。茶道においては、礼は手のつき方と頭の下げ方によって真の礼・行の礼・草の礼の3種類に分かれている。これらの礼は場面と状況によって使い分けられるのである。たった今2人がした深い礼は真の礼という1番格式の高いものだ。これから部活動、つまりお茶のお稽古が始まるということに対する深い感謝の意が込められているのである。

「今日はまだ他の部員は来てないんだ。もう少し人数が揃ったら始めようか」

頭を上げた後、和樹がそう提案した。

「そうですね」

一彦もそれに同意する。同じ稽古をするのであれば、数人でまとめて1度に教えてしまったほうが楽であり効率もいい。

「だからそれまでは足崩してていいよ。お稽古が始まる前に痺れちゃったら大変だからね」

言いながら和樹は自身も足を崩して胡坐になった。

「はい、そうします」

丁寧は答えて一彦は立ち上がった。そして畳の上を和樹の近くまで進んだ。

和樹はこの茶道部の部長を務める3年生である。そして一彦が入部するまでは茶道部唯一の男子部員でもあった。一彦が茶道に興味を持ち茶道部に入部しようと思ったのは、彼の存在がきっかけであったと言っても過言ではない。

一彦が通う高校では4月の新学期が始まってすぐに新入生に向けた部紹介という行事が行われる。体育館内を部活動ごとに分け、新入生が自由に各部の紹介ブースを見て回るというものである。紹介内容は部の活動内容や実績、制作した作品など部によって様々である。きちんとした説明をする部活もあれば、毎年趣向を凝らした出し物が名物となっている部活さえある。

一彦は、悠基と一緒にたまたま前を通った茶道部のブースでお点前を見た。そのお点前をしていたのが和樹だったのだ。真剣なその眼差しと、洗練された動作に目を奪われた。そしてそのすべてがお茶を美味しく客に振舞うための動作であるということに驚いた。今まで自分の知らなかった世界が今まさに目の前にある。そのことに気付いた瞬間に、一彦は茶道部に入部することを決めたのだった。

「先輩、何を読んでいたんですか」

カバンを和室の隅に下ろし、和樹と同じように胡坐を組んで一彦は座った。制服のストラップ越しに畳の冷たさが伝わってくる。ひんやりとして気持ちよかった。

「古文の参考書だよ」

一彦の問いに応えて、和樹は本を手にして中身を一彦に見せながら言った。参考書には赤や黄のペンでたくさん書き込みがされていた。

「凄いですね。やっぱりもう3年生は受験勉強を始めてるんですか？」

「人によってまちまちな。でも、まあ、早く始めるに越したことはないな」

「そうですか……」

一彦が語尾を弱めると、それを弱気と受け取ったのか、和樹が励ますような口調で言った。

「でも鈴木はようやく高校受験が終わったところなんだから。まずは高校生活を楽しまなくちゃ」

そしてパタリと参考書を閉じた。それはとても自然な動作であった。

（ああ、余計な心配をかけてしまった）

一彦は思った。

恐らく、和樹は自分が部室で勉強していることで後輩に受験のプレッシャーを与えてしまうのが嫌なのだろう。本当は少しの時間でも惜しいだろうに。

やさしくて強い人だ、と思う。そしてそれをできるだけ他人に感じさせないようにしている。自分の考えや信念をきちんと実行でき、それでいて控えめな。

（……羨ましい）

とても自分にはできない。自分は常に自身のことだけで精一杯だ。一彦にとって和樹は同じ男子部員ということもあって安心できる先輩であり、同時に憧れと羨望の的でもあった。彼が部活を引退してしまうまでの間に、茶道についてだけではない、様々なことを学び取りたいと感じていた。

しばらく2人で雑談をしていると、和室の障子がすっと開いた。開いた障子の向こうには優衣と里美が正座をして並んでいた。

「こんにちはー」

里美が明るい声で言った。里美は同じ茶道部員であり、優衣とクラスメイトでもある女の子だ。優衣が穏やかな顔つきであるのに対して、里美は実に活発そうな表情を持っていた。

「太田さん、桐生さん、こんにちは」

「こんにちは。あれ、太田さんは今週委員会の当番じゃ……」

早くに姿を見せた優衣に対して一彦はその疑問を口に出した。今日は部活に行けるかどうか分からないと言っていた優衣の言葉が思い出された。

「来週当番の子が代わって欲しいって言うから、交代になったんだ」
優衣がそう説明すると、一彦は納得して頷いた。

2人のやり取りが終わったのを確認すると、

「それじゃ、挨拶をしようか」

和樹がそう言って姿勢を正座へと変えた。それに倣って一彦も姿勢を正す。そして4人揃って礼をした。

「よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

すつと綺麗に右足で立ち上がり、まずは里美が和室へと踏み入れた。それに優衣が続く。すつ、すつと白い靴下と畳が擦れる音が耳に届いた。足を摺るようにして歩く摺り足という歩き方だ。摺り足は茶道だけでなく剣道や能などに至るまでの和の動作の基本となっている。2人は一彦と和樹のそばに歩み寄り、荷物を下ろしながら一彦の横に正座をした。

茶道部の今年の新入生は今の所は和樹と優衣、里美の3人である。

「1年生が全員揃ったから、お稽古を始めようかな」

並んで正座をする新入生3人の顔を順に見ながら和樹が言った。

「はい」

返事をする3人の声が合わさり、和室に笑みが零れた。

窓のすぐ外には校庭が広がっている。障子を閉めているため様子を伺うことはできないが、外からは運動部の掛け声が聞こえてきて

いた。彼らは目まぐるしく身体を動かし、声を出し、練習に励んでいるのだろう。

一方、和室の中は非常にゆったりとした空気が流れていた。時間の進みが何倍も遅くなってしまったかのような感覚さえ抱いてしまう。どちらがより良いのかなど、そんなことは決して言えない。それは好みと考えの違いだからだ。しかし、日々に何かに追われているかのような焦燥感を抱いていた一彦にとって、この穏やかな空間はどこよりも安らげる場所であった。

（何だか、夢のようだ）

そう思った。

ふいに窓の近くを鳥が横切り、畳の上を影が踊った。感覚が研ぎ澄まされていく。何でもないようなことが、とても大きな意味を持つような気がするのだ。顔を上げ窓のほうへと向けると、同じように和樹もその視線を窓へと向けていた。それだけのことが、とても嬉しかった。

一彦が茶道部に入部してからまだ1ヶ月も経っていない。学ぶことはまだこれから山のようにある。それでも学ぶことができるということがとても喜ばしいことのように感じられた。こんな感覚は久しぶりだった。

「今日は帛紗さばきの練習をしようと思うんだけど、帛紗はもう用意できてるかな？」

自分のカバンを引き寄せながら和樹が言った。

「はい」

と、優衣と里美が続けて答えた。

「鈴木は？ まだなければ俺のを1つ貸すけど」

和樹の問いに答える前に、一彦は優衣のほうに視線を送った。彼女も同じように一彦を見る。

「ナイスタイミングだね」

「だね」

そして笑い合う。2人のやり取りの意味が分からない里美と和樹

はきよとんとした表情を浮かべていた。

「大丈夫です。ちょうど今日、準備できたので」

笑顔で一彦は自分のカバンへと手を伸ばし、優衣にもらった帛紗を取り出した。

晴れやかな気分だった。

部活を終えて校舎から出ると、太陽はすっかり西へと傾いていた。日没まではまだ時間がある。しかし朝から空をびっしりと覆い尽くしている雲のせいで、辺りはすでに薄暗かった。夕陽は雲の隙間から必死になって橙の光を届けようとしているが、その光は驚くほどに心許ない。

「もうすぐ5月だっていうのに何で寒いの」

冷えた風に揺れる長い髪を押さえながら里美が言った。

「でもゴールデンウィークは夏日になるって天気予報で言ってたよ。変な天気だよね」

そう言って優衣も肩を震わせる。一彦は真冬でも裸足で部活動をしていた経験があるため、このくらいの寒さは何とも思わない。しかし敢えて2人の言葉を否定する必要もないので黙っていた。

利用する駅が同じために自然と一彦は2人と一緒に歩き始めたが、正直一体何を話せばいいのか分からなかった。まだ出会って間もなく、クラスは別。週2回の部活という繋がりだけではそう簡単に親しくなれるはずもない。おまけに一彦は話好きではなく、場を盛り上げる会話などまったくと言っていいほど知らなかった。

（正直、居た堪れない）

唯一の救いは一彦に無理に話を振ることもなく優衣と里美が会話を楽しんでいることだった。

正門に向かって歩いていけると、門のすぐそばに建てられている武道館から数人の生徒がまばらに出てきた。2階建ての武道館は剣道部と柔道部、そして空手部が共同で利用している建物だ。出てきた

生徒はそのいずれかの部員なのだろう。一彦は特に気に留めることもなくその前を通り過ぎようとした。

その時、

「ヒコー、おーい！」

悠基の声が聞こえた。

声のしたほうへと顔を向けると、武道館から出てきた悠基と目が合った。彼は明るい笑顔を浮かべながら小走りで一彦たちのほうに向かってきた。カバンを肩に掛け、左手には紫色の竹刀袋が抱えられている。

一彦は足を止めて悠基を待った。それにつられて優衣と里美もその場に立ち止まる。

「今部活が終わったんだけど、ヒコも今帰るところ？」

すぐ目の前にやって来た悠基が尋ねた。

「ああ。佐藤も？」

「そう。ちょうどよかった。一緒に帰ろうぜ」

一彦が頷くと悠基は実に嬉しそうに笑った。見ているだけで幸せになれてしまうような、そんな笑顔だ。つり目のために目つきが悪いと評されることの多い悠基だが、笑うとその悪い印象は跡形もなく消え去ってしまう。この笑顔に出会うと、一彦は思い悩んでいたことさえどうでもよくなってしまうのだ。

（だから、結局は離れられないんだ）

自分は逃げ出したはずだというのに。

「ああ、帰ろう」

内心複雑に思いながらも、小さく笑って一彦は言った。
すると、

「鈴木くんの友達？」

親しそうに話す一彦と悠基の様子を見ていた優衣が尋ねた。里美も興味津々の様子で2人を見ている。彼女たちは悠基とは初対面であつたのだ。

一彦は2人から悠基の顔が見えるように少し身体を動かした。

「同じクラスの佐藤」

そして簡単に紹介する。一彦が詳しく言わずとも悠基は自分で喋り始めるのだ。だったら本人に任せるのが一番いい。

「佐藤悠基、よろしくー。ヒコと一緒に1の5なんだ。ちなみに剣道部。2人は？」

左に抱えた竹刀袋を示しながら悠基が言った。軽く弾んだ口調。そこからは悠基の明るい人間性が窺えた。場が和やかな雰囲気となっていく。

「あたしは桐生里美。1の2」

「同じく1の2の太田優衣です」

「2人とも鈴木くんと同じ茶道部なの」

続けて優衣と里美が自己紹介をした。

「ねえ、佐藤くんって鈴木くん仲間なの？」

一彦と悠基の顔を見比べながら里美が尋ねた。染められた茶の髪と複数のピアス、誰が見ても明るく活発そうな悠基と、手の加えられていない黒髪、落ち着いた表情と口調のどこから見ても優等生タipesの一彦が、こうして親しそうに話していることが不思議だったのだろう。

一彦自身、正直なところ悠基のような軽い性格の人間は苦手であった。それなのに悠基とは一緒にいるのは、どこか楽な気持ちでいられるのは、何故だろう。

一彦が口を開く前に悠基が言葉を発した。

「仲いいよ。ヒコとは中学が一緒に同じ剣道部だったんだ」

すると悠基の言葉を聞いた優衣と里美が同時に驚いたような表情で一彦を見た。

「えっ、鈴木くんって剣道部だったの!？」

優衣と里美の反応に、面倒くさいことになりそうだな、と思いなながらも一彦は答えた。

「うん、実はね」

その原因を作った悠基に向けて、少しだけ恨みのこもった視線を

送る。

しかし一彦の視線に気付いているのかいないのか、悠基は言葉を続けた。

「3年間一生懸命稽古してて、しかもすっげー強かったのに。高校入ったらいきなり茶道部だもん、ビックリしたよ」

そして今度は悠基が不満そうな視線を一彦のほうへ向けた。一彦は顔を逸らしてその視線を受け流した。

（すっげー強い、か）

受け流しながら、心の中で悠基の言葉をなぞった。

確かに自分は強かった。強く、あろうとしていた。それでも悠基に勝てたことは一度もなかった。

だから。

ちりつと、心臓が灼けるように痛んだ。

「どうして剣道やめちゃったの？」

一彦の思いも知らず、優衣が純粹な疑問を口にした。一彦はまだあまり優衣と里美に自分自身について話すということをしていなかった。そのため、この機会に知りたかったのだろう。これから一緒に部活動を共にしていく一彦という人間のことを。

「特に深い理由はないけど……茶道のほうに興味を持ったから、かな」

歯切れ悪く一彦は言った。

半分の嘘と、半分の本音。自分でさえ持て余している感情を、どうして他人に説明することができただろう。

「部紹介の時に池田先輩のお点前を見たんだ。初めてお点前っていうものを見たからかもしれないんだけど、感動しちゃって」

しかし、これは本当だ。

そして口にした途端にその時の高揚した気持ちがよみがえってくるのだから不思議なものである。

「えっ、そうなの？ 実は私も池田先輩のお点前見たんだ。綺麗だったよね、なんか、異世界みたいだった」

目を輝かせながら優衣が言った。里美もそれに同調する。

「あたしは見波先輩を見たの。やわらかくて綺麗だったよー」

見波とは2年生の茶道部副部長のことである。彼女は和樹が引退した後に部長を任されることとなっていた。

「じゃあ太田さんと桐生さんも部紹介で茶道部に入るって決めたんだ。お点前の力って凄いなあ」

道具を扱う指先、柄杓の動き。真剣で、それでいて温かな眼差し。息を呑んだのは自分だけではなかったのだ。

今日ここで発覚した共通点に、驚きながらも一彦は嬉しくなってしまう。自然と顔には笑顔が浮かび、声が弾んだ。

「なんか茶道部って楽しそうだね」

一彦たちが話しているのを見て、羨ましそうな口調で悠基が言った。

「剣道部は楽しくないの？」

「剣道はもちろん楽しいよ。でもなんていうか、全員がライバルと
いうか、そういう雰囲気でさ。みんなで和気藹々っていう雰囲気は
少ないな」

里美の問いに悠基は苦笑しながら答えた。

「それに女の子がほとんどいないしね。華やかじゃないよ」

しかし最後に冗談めいた口調で付け加えて笑った。それにつられて優衣と里美も笑う。ともすれば暗くなりそうな会話の流れだっただけに、さすがだな、と一彦は感心してしまう。

「俺とヒコは電車なんだけど、2人は？」

上手に話題を変えて悠基が尋ねた。

「私たちも電車だよ」

ね、と優衣と里美が笑う。優衣と里美は茶道部に入部後、部室で初めて言葉を交わしたのだという。しかし同じクラスであったということもあり、あっという間に親しい間柄になっていた。

「じゃあ4人で一緒に駅まで行こうよ」

悠基はそう言いながら同意を求めるかのように一彦の顔を見た。

一度視線を合わせた後、一彦もそれに頷く。

「そうだね。折角だし」

自然と口調は穏やかなものとなっていた。

居た堪れない、そう思っていた先ほどまでの気分はどこかへ行つてしまったようだ。悠基がそれを吹き飛ばしたのだった。

「うん、帰ろー。いいよね、優衣」

「もちろん」

笑いながら優衣と里美も頷く。彼女たちの返事を聞き終えて一彦は言った。

「それじゃ、遅くならないうちに帰ろうか」

その言葉を合図にするかのようにして4人は歩き出した。

冷えた風が頬をくすぐりながら通り過ぎていく。夕陽の光は今も雲の中でくすぶったまま、一彦たちのところには届かない。それでも寒いなどと言い出す者は1人もいなかった。

話題を作るのはもっぱら悠基だったが、一彦はそれに同調したり、反発したりしながら話を繋いだ。普段は面倒で堪らない会話も、この時ばかりは気にならなかった。楽しいとさえ感じられた。

優衣と里美も楽しそうに笑っている。先ほどまではこの笑顔を遠い気持ちで見ているだけだった。しかし今は違う。笑顔を作る空間に自分も含まれている。そんな気がしてならなかった。

遠い景色を眺める。

昔から一彦は何かを競うということが嫌いだった。競わなくてはいけないのなら、絶対に1番にならなければ気に入らなかった。そしてそのための努力も怠らなかった、つもりでいる。

そして気が付けば誰もが認める「優等生」となっていた。

しかしその分、一彦は常に焦燥感に苛まれ続けられることになった。努力していることが当たり前だと周囲の人間には思われて、期待はどんどん膨らんでいく。傾斜角度が増し続ける坂道。手を抜いたらあつと言う間に坂の下に落とされるような気がして、その恐怖が更に一彦を突き動かす。

終わりなど、永遠に見えなかった。

もっともらしい理由をつけてはいたし、それも決して嘘ではなかったけれど、つまるところ、一彦は逃げたのだ。

剣道から。そして決して勝てることのない悠基から。

努力しても手に入らないものがあるという現実にぶつかりかけて、坂道そのものをなかったことにしてしまったのだ。そうしなければ歩き続けることができなかった。立ち止まってしまったら、2度と歩き出せないような気がした。逃げたのだという自己嫌悪に襲われることになったとしても、立ち止まったままにいるよりはずっとよかった。一刻も早く消し去りたいと思っていた。

それでも悠基という存在が嫌でも一彦にそのことを思い起こさせる。

それなのに、

（何故なのだろう）

一彦は思う。

何故、悠基と自分は一緒にいるのだろう。

悠基は一彦とは全く正反対の人間だ。勝ち負けということなど一切気にしない。自分が楽しければそれでいい。それでいてこれと決めたことには真剣になれる性格。一彦は何に対しても努力を欠かさなかったが、それは好きだからこそその一生懸命さとは別のものだった。何もかもが、異なっていた。

一彦が悠基に出会ったのは中学1年生の春、剣道部に入部した時のことだった。先に声を掛けたのは悠基のほうからだっただろうか。懐く、という表現が一番合っているのだかもしれない。正反対のタイプであったにも関わらず、悠基はすぐに一彦に懐いてしまった。悠基は何かある度にヒコ、ヒコとその名を呼んでは近づいてきて、気付けば何もなくてもそばにいるようになっていた。最初は面倒くさいと思っていた一彦だったが、いつの間にかそのことに慣れてしまった。どんなに邪険に扱っても、遠慮のない物言いをしても、悠基の態度は変わらなかった。好かれて悪い気はしなかったし、何よ

りも「完璧」でない自分を見せても悠基は全く気にとめない。それが心地よくて気が楽だった。

悠基は自分を追い込む存在でありながら、同時に自分を許してくれる存在でもあったのだ。

（だから、離れられないのだ）

それが矛盾した感情だとは知っている。

けれども、矛盾しない人間などどこにいるのだろうか。

屈折した思いであったとしても、それでしかこの関係を肯定することができないのであれば受け入れるしかなかった。

一彦は歩きながら暗く沈んだ空を見上げた。

だらだらと光をくすぶらせている太陽が、夕闇を引き連れながらその高度を下げていく。徐々に暗くなりゆく視界の中で、それでも確かに悠基たちの笑顔が見える。耳には楽しそうな弾んだ声が届き、その度に温かなものが心の中に染み込んでくる。

一彦を責め続ける焦燥感は、今はどこかに影を潜めているようだった。

たどり着いた駅は帰路につく学生や会社員たちでごった返していた。時の流れを語るかのように、人々は早足で自動改札を通り過ぎていく。澱みのないそのスムーズな流れは人そのものを機械のように錯覚させた。その流れを遮らないように、自動改札から少し離れたところで一彦たちは足を止めた。

「俺たちは下り線なんだけど、2人は？」

行き先と発車時刻を告げる電光掲示板を眺めながら悠基が尋ねた。

「私たちは上り」

「反対だからここでバイバイかな」

それに対して優衣と里美が口々に答える。そっか、と悠基は呟いたが、そこにどんな感情が含まれているのかは分からなかった。

「それじゃ、2人とも気をつけて」

別れの言葉の代わりに、一彦は優衣と里美を心配する言葉を掛けた。物騒な世の中だ。常に注意を払っているに越したことはない。

「うん、ありがとう。鈴木くと佐藤くんも気をつけてね」

頷きながら言った優衣の言葉に悠基が笑った。

「大丈夫大丈夫。俺たちは何かあってもコレがあるから。俺もヒコも強いよ」

そして竹刀袋を掲げて見せた。悠基の竹刀袋には予備を含め2本の竹刀が収められている。

「ま、道場以外で強さを発揮する機会なんてなくていいんだけどね」首を竦めながら冗談めいた口調で一彦も言う。

「確かにそうだね」

優衣が笑った。そのすぐ後に里美が言った。

「優衣、そろそろ電車来るみたいだよ」

「えっ」

電光掲示板と時計を順に確認して優衣が目を丸くした。

「本当だ。行かなくちゃ」

そして上着のポケットの中に手を入れた。おそらくそこに電車の定期入れが入っているのだろう。

「佐藤くん、鈴木くん、今日はありがとう」

丁寧に告げる優衣の言葉は穏やかでやさしい。一方で里美の声が明るく響く。

「ありがとー、また明日ね」

一彦と悠基もそれに応える。

「こちらこそ」

「気をつけて。またねー」

簡潔に別れを告げ合うと、優衣と里美は急ぎ足で自動改札機のはうへと向かっていった。彼女たちの姿は人々の流れに飲み込まれ、あっという間に見えなくなった。

一彦が優衣と里美に出会ってから約2週間が経過していたが、今までは必要最低限の言葉しか交わしてこなかった。こんなにもたくさんのお話をしたのは今日が初めてのような気がした。

（もう少し、俺は積極的に他人とつき合わなければいけないのかも

しれないな)

そう思った。

少しずつ、理想と現実の距離を埋めていければいい。
優衣と里美の後ろ姿を完全に見送った後、一彦は電光掲示板を眺めた。どうやら一彦と悠基が乗る電車は10分後に駅に到着するようだ。

「佐藤、俺たちも行こう」

カバンの中から定期券を取り出しながら一彦は悠基を促した。電車の発車時間ギリギリになって慌てるのは嫌だった。

「そうするか」

悠基もそれに頷く。2人は自然と並んで歩き出し、機械のような流れに逆らうことなく改札機を通過した。

しばらくはお互いに無言であったが、ホームへと至る階段の途中で悠基が口を開いた。

「茶道部、楽しい？」

その表情には珍しく笑顔がない。逆に一彦は笑顔を浮かべながら答えた。

「……楽しいよ、すごくね」

それは心からの言葉だった。

これまではずっと、自分以外の人間は敵でしかないと思い続けてきた。勝つためにはどんな努力も惜しまなかったし、そのために時には自分の心身を削るような思いもしてきた。それでいいのだと思っていた。けれどもきつと、そうではないのだろう。

人との繋がり。相手を、そして自分を、お互いを思いやること。

勝ち負けという言葉の一切通用しない世界があるということを知り、そこに自分も身を置くことができるのかもしれないという期待を抱く。新しい世界を通じて得たこれらのことが、今の一彦にはなによりも尊いもののように感じられるのだ。

一彦のその言葉を聞いて、悠基はふと寂しげな微笑みを浮かべた。
「そっか……うん。それなら、もう、いいか」

そして呟いた。それは何かを諦めるような、それでいて喜んでい
るような。感情の読めない言葉であった。

一彦はそんな悠基に驚いて、隣を歩くその顔を凝視した。今まで
悠基のこんな様子を見たことがなかったからだ。しかしすぐに視線
を逸らした。悠基のその言葉の意図が掴めずに、どんな反応をして
いいのか分からなかった。

けれどもきつと、分からなくていいのかもしれない。

（俺と佐藤は違うのだから、）

だからこそ、こうして一緒にいられるのだろうか。

階段を上りきり駅のホームにたどり着くと、そこは予想通りたく
さんの人で溢れていた。あまりの人の多さに酔ってしまいそうだっ
た。

人混みをかき分け電車を待つ列に加わると、悠基が大きなあくび
を1つした。

「寝不足か？」

そういえば今日の悠基は授業の合間を睡眠時間に充てようとして
いた。

一彦が尋ねると、悠基はいたずらがバレてしまった子供のような
表情で笑った。

「実は夜遅くまで本読んでてさ。あまり寝てないんだ」

「へえ、お前が珍しいな」

一彦は素直に驚きを口にした。悠基は読書というものを殆どしな
いと聞いていたからだ。

「剣道についての本。結構面白かったんだ」

悠基は声を弾ませながら言った。

「今までは身体で覚えんのが一番だと思ってたんだけど。読んでみ
ると理論も面白いもんだな」

楽しそうに、それでいて真剣に。悠基の剣道に対する姿勢だけは
いつも真面目そのもので、それは出会った時から何も変わってはい
なかった。

（俺が逃げた分まで、佐藤には貰いて欲しいな）

だから、少しでも自分にその手伝いができればいいと一彦は思った。

「じゃあ俺が持つてる本、貸そうか？」

一彦が提案すると、それを聞いた悠基が目を輝かせた。

「マジ！？ やった、ヒコ、サンキュっ！」

それは抱きついてくるのではないかと思えるほどの喜び様であった。その様子に一彦は少し呆れたが、これが悠基という男なのだから、と、微笑ましくも思えるのだから不思議なものだ。

共に剣道部に所属している時は、一彦にとって悠基は友人でありながら同時に負かしたい敵でもあった。しかし剣道をやめた時、ようやく悠基は倒すべき対象ではなくなったのだった。今でも自己嫌悪と後悔が一彦を蝕んでいる。逃げ出したという事実からも逃れられない。けれどもその苦しみを乗り越えることさえできればやっと、

（ただの親しい友達になれるのかもしれないな）

そう思えた。

（そうであつたら、いいのに）

何に願えばいいのか分からない。けれどもいつかを、必ずたどり着きたいいつかを目指して、進めたらいい。

ホームの屋根と屋根の間から覗く空は朝から変わりのない曇り空。どんなに冷たい風が吹いても厚い雲は剥がれない。しかしその向こうでは夕陽が輝き、満天の星々が光を誇る時を待っている。今日の月は一体どんな形をしているのだろう。手に入らないからこそ、手に入れられるものもあるのかもしれない。

人懐っこい、一彦の好きな笑顔を浮かべながら悠基が話し始めた。それに答えて一彦も笑っている。

速度を落としてしながらやってきた電車は綺麗に人々の列の前に扉を合わせて停車した。扉を開けて車両は次々と人を飲み込んでいく。重く澱んだ気持ちを駅のホームに置き去りにして、一彦も悠基と共に電車の中に乗り込んだ。いつもは不快な満員電車も今日はあまり

気にならない。

小気味よい音を立てて扉が閉まった。ゆっくりと電車が動きだし、駅のホームが遠ざかっていく。

どうか、

（どうか明日も笑えますように）

そして置き去りにした感情に再び足を引かれることがないように。願って一彦は悠基の顔を見た。その視線に気付いた悠基が不思議そうな表情で首を傾げるが、一彦は何でもないと首を小さく左右に振った。窓の外へと視線を向けると、硝子に映った自分と目が合った。もう1人の自分は驚くほどに穏やかな表情だった。

責め続けてきた自分とようやく、向き合えるような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5016p/>

1. 和

2010年12月14日21時25分発行